

“ 今月 ”を理解する

## メディアレビュー

## MIX

“オープンソース”とは思想なのか文化なのか、また純粋に技術なのか。この言葉が一般化し、多方面で使われるようになるにつれて、我々のとらえる言葉の形はゆがみ始めているようにも思われる。今回は、書籍などはもちろん、ウェブの世界で行われているオープンソースプロジェクトからツールまでをもメディアととらえ、この言葉の持つ本来の意味を探していく。

Text:長野弘子

さらに深化していく“オープンソース”という言葉の全貌を追いかける

MEDIA REVIEW MIX



film NO. 1

『REVOLUTION OS』

監督: J.T.S.ムーア

出演: リチャード・ストールマン、  
リーナス・トーバルズなど

オープンソースカルチャーの潮流を追ったドキュメンタリーフィルム。現在、「PaSaTa」にて、全編ノーカットのストリーミング上映が行われている。

なおDVDの日本語版は今年8月に発売予定。6月末まで映画全編をインターネットでストリーミング配信し、字幕データを改編、修正するという試みが行われている。

http://biztech.nikkeibp.co.jp/biztech/mag/revos/

## フリーソフトウェアとオープンソースが乖離する過程が見える

『REVOLUTION OS』は、フリーソフトウェア運動がオープンソース運動へと受け継がれ、GNU/Linuxが独自の発展を遂げていく過程を克明に描いたオープンソースコミュニティのインサイドストーリーである。以前、ソフトウェアは開発者を意識することなしに、自由にやり取りされていた。しかし、1976年1月、マイクロソフトの若きCEOであるビル・ゲイツがプロプライエタリー・ソフトウェアソースコードを公開しない商用ソフトという挑戦状を、ホビイスト(当時のマイコンユーザー)につきつけてから、マイクロソフトとGNU/Linuxの長い戦いが始まったのだ。

リチャード・ストールマン、リーナス・トーバルズ(Linuxカーネル作者)、エリック・レイモンド(『伽藍とパズル』著者)、ブルース・ベレンズ(『オープンソース定義』作者)ほか、多くの関係者の証言をもとに、フリーソフトウェアおよびオープンソース運動が生まれたきっかけ、ウェブサーバー『Apache』などのキラーアプリ、レッドハットほかディストリビューター、Windows OSに対するゲリラ的払い戻し運動など、GNU/Linuxがビジネス市場において急速な成長を遂げた数々の要因を取り上げて

いる。とくに、GNU/Linuxを急速に普及させるために、フリーソフトウェアという名称をオープンソースへ変更したときのエピソードが興味深い。映画のなかで、エリック・レイモンドは「当時、もし企業の幹部に会いに行ったら、“フリーソフトウェア”などと口にしようものなら、フリーソフトウェア財団による知的財産権への攻撃と混同され、企業はまったく耳を貸さなかったよ」と回想する。フリーソフトウェアに代わる新たな用語は、企業が受け入れやすい名称を第一に考えられたのだ。もちろん「フリー=無料」と誤解を受けやすいフリーソフトウェアと比べて、オープンソースという言葉がGNU/Linuxの普及に貢献したのは否めないが、同時にフリーソフトウェアという言葉とオープンソースコミュニティの考え方に微妙なずれが生じることにもつながった。映画のなかで、ストールマンとトーバルズが名称をめぐる見せた意見の食い違いもそうだが、ごく最近も両者の方向性の違いが明らかになるニュースが流れている。膨れ上がったオープンソースコミュニティで、今後の方向性をいかに決定するのか、トーバルズはどこまで支配力を持つのか。今問われる、オープンソースコミュニティの方向性がこの映画からは見て取れる。



『SourceForge.net』

オープンソースソフトウェアの開発者にメーリングリスト、バグ追跡システム、掲示板・フォーラム、タスク管理システムなどのサービス提供を無料で行うサイト。

- URL http://www.sourceforge.net/
- URL http://sourceforge.jp/

## ディスカッションモニタリング、コミュニティ参加を通してオープンソースを知る

オープンソースソフトの利点は、自由にソースコードを改変し、改変したプログラムを再配布できることだ。現在、無数のオープンソースソフト開発プロジェクトが進行しているが、これらの開発プロジェクトを一

か所にまとめて提供しているのが『SourceForge.net』である。同サイトは、世界最大のオープンソースソフトの開発およびダウンロードサイトであり、現在、62万人以上の登録ユーザーが、6万件を超えるオープンソースソフト開発プロジェクトに携わっている。このサイトがユニークな点は、オープンソースの開発者のためのBBSなど、情報提供メディアとしての側面だけではなく、プロジェクト管理

者のための管理ツールも提供して、プログラマー同士が実際にコラボレーションできる開発環境を実現している点だ。

プログラマーは、ソースコードのアップロード、ダウンロードのほか、特定プロジェクトのディスカッションの自動モニタリングも行える。さらに、これらを実現するコラボレーションツール自体も、同サイトの開発プロジェクトの1つとして開発、改良が続けられている。日本でも、2002年4月19日から正式に『SourceForge.jp』の運用が開始されている。現在のところ登録ユーザー数はおよそ5千人、登録プロジェクト数は約500件。このオープンソースの理念の詰まったコミュニティに参加、またウォッチする行為こそ、オープンソースの深層を知るための方法になっていると言ってもいいだろう。

MEDIA REVIEW MIX

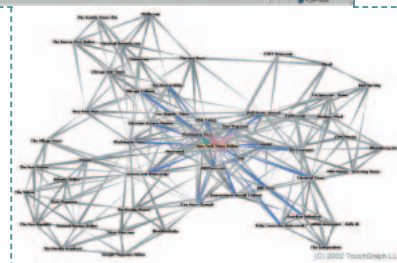
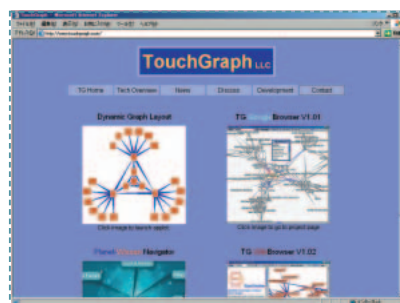
## 商用ツールにない進化の過程を追うことでオープンソースの意味を見出す

『タッチグラフ』は、オープンソースの理念にそって作成されたJavaベースのグラフ自動生成ツールを提供するサイトで、先で紹介した『SourceForge.net』内にオープンソースソフト開発プロジェクトとして登録されている。このツールを使えば、文字のリストではなくグラフィックベースでデータを閲覧できる環境が実現するため、たとえばサイト同士の関係性を表すデータをリアルタイムにグラフ化するということも可能になる。

このサイトでおもしろいのは、『ゲージル・リレイティッド』という検索ツールだ。これは検索エンジンのGoogleが他社に開放している検索データベースを利用して、『タッチグラフ』で提供するツールと組み合わせることでグラフィカルな検索ツールを実現している。ここでは通常のGoogleのように重要度で検索結果が表

示されるのではなく、各サイトがどのように関連し合っているかという観点から、グラフ表示されるので、そのグラフィックを見ることで現在のネットワークの広がりかたを視覚で把握できるのだ。

なぜ、「メディア」レビューのコーナーでこの「ツール」を紹介しているのかというと、やはりこのツール自体がオープンソースの思想で作られているからである。つまり、同じような機能をはたす商用ツールは少なからず存在する。しかし、このサイトをチェックしていると、Googleとの連携の例でもわかるように、そのツールが日々進化、そして目的別に分化しているのだ。このツールの「成長」のしかた、そこからオープンソースであることの本質は何かという重要な答えが見えてくるはずだ。



Tool NO.3

『タッチグラフ』データをツリー状に視覚化して表示するツールを提供するサイト。もちろんこのツールはオープンソースの理念にそって作られている。

- URL http://www.touchgraph.com/

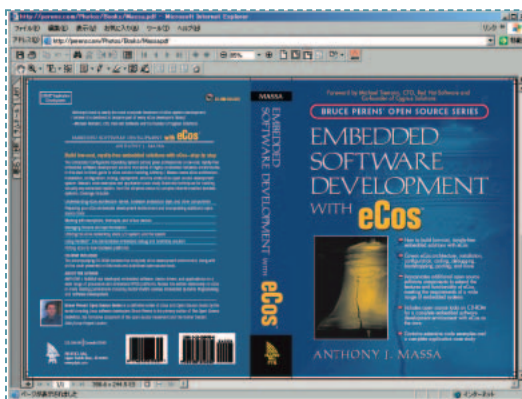
## オープンソースという思想が ソフトウェア以外の世界に飛び出す

フリーソフトウェア / オープンソースの概念は、ソフトウェア分野だけではなく書籍や音楽などありとあらゆるコンテンツへと影響を与え始めている。技術書と学術書の出版社であるプレントリスホールは、オープンソースの概念を書籍出版に取り入れ、コンテンツの自由な配布を認める新たな書籍シリーズを発行している。

『Debian Linux』の開発を支援した人物で、オープンソース・イニシアチブ(OSI)の共同創設者としても知られるブルース・ベレンズの名を冠した同書籍シリーズは、「オープン・パブリケーション・ライセンス」<sup>URL01</sup>のもとで、複製やアップデートが認められるほか、書籍(有料)が書店の店頭と並んだ数か月後に、ネットでまったく同じ内容のコンテンツを無料配布することになる。またネット上のコンテンツは頻

繁にアップデートされ、著者は読者からの意見を反映してさらなる編集を加えていく。これまでに無線デバイス向けオープンソースOS『eCos』の開発に関する書籍など、合計5冊が同シリーズの書籍として出版された。

ローレンス・レッシング教授が率いる「クリエイティブ・コモンズ」またオライリー・アソシエーツも一部書籍をオープンソース出版するなど、ほかのコンテンツの世界にもオープンソースの思想は浸透しつつある。このシリーズはその書籍の内容もさることながら、配本形態などをウォッチし続ければ、オープンソースの思想がどの分野で、どのような形で有効なのかを理解する重要な情報になるだろう。



Web Journalism NO.4

『ブルース・ベレンズ・オープンソース・シリーズ』

オープンソースの思想にのった書籍シリーズ。書籍版は有料提供。ネット版は無料ダウンロードができ、ネット版では読者からの意見を反映し、書籍の内容自体を随時変更している。

- <sup>URL01</sup> <http://perens.com/Photos/Books/Massa.pdf>
- <sup>URL02</sup> <http://www.opencontent.org/>

### MEDIA REVIEW MIX



Directory NO.5

『オープン・ディレクトリー・プロジェクト(ODP)』

人の手によって編集されているウェブ最大の包括的なディレクトリー。世界規模のボランティアエディターコミュニティによって運営されているのが特徴だ。

- <sup>URL03</sup> <http://dmoz.org/>

の協力により編纂が完成したが、ODPはウェブ上のオックスフォード編纂と言ったところか。現在、カテゴリー数は約46万種類、サイト数は380万を超えている。

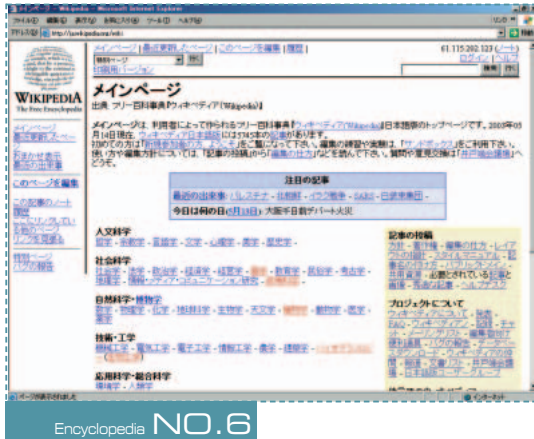
ODPでは独自の無償使用ライセンス方式を用いており、ディレクトリーへの登録はもちろん、ディレクトリーの使用もすべて無料。企業、個人に限らずだれでも利用できる。この巨大ディレクトリーの構築

## ウェブ版オックスフォード大辞典で オープンソース的編纂の“力”を知る

世界中からボランティアとして集まった編集者たちの手で作られたウェブディレクトリー『ODP』は、オープンソース方式で開設された世界最大のディレクトリーである。昔のオープンソース運動と称されるオックスフォード英語大辞典は、大勢のボランティア編集者

は、ヤフーのデッドリンクに嫌気がさしたカリフォルニア在住のプログラマー、リッチ・スクレンタの呼びかけから始まった。1998年6月5日に開設されたサイトは、2週間で200人の編集者を集め、2000カテゴリーにわたる2万7000サイトを集めることに成功した。現在、編集者は約5万7000人にのぼっている。

オープンソース形式でのプログラムやコンテンツ開発に関しては、責任の所在がはっきりせずに質の高いものが生まれにくいとよく批判される。しかし、ヤフーのウェブサーファー数百人が一日中働くより、自発的に集まった編集者が得意分野を担当したほうが質の高いディレクトリーが完成することを、ODPは証明した。このサイトは、今後もオープンソース的編纂の“力”がどのようなものかを読み取るための、重要な情報になるだろう。



Encyclopedia NO.6

『ウィキペディア (Wikipedia)』  
読者が協力しながら書き込んでいく、フリーでコピーレフトな百科事典。だれもが書かれているページの内容を書き換えることができ、だんだんと解説が強化されていくという特徴を持つ。

URL <http://ja.wikipedia.org/>

## 知識そのものもオープンソース化してしまう 巨大百科事典が示すもの

1つの巨大な百科事典をインターネット上で作り上げようというプロジェクトが2001年1月15日から始まっている。それが『ウィキペディア』だ。コンテンツやウェブページの編集、追加をブラウザから直接行うこと

のできるツール「Wiki」を使ったこのサイトは、大勢の人の知識を共有した“オープン・パブリッシング”を実現した。現在、英語で12万件、それ以外の言語で7万5000件もの記事が集められた巨大なプロジェクトとなっている。1人のプログラマーから始まったフリーソフトウェア運動は、名称を変えたり、ソフトウェアにとどまらない多様な分野へと発展し、世界中に無数のコミュニティとして広がりを見せている。

これらの動きに1つ大きな共通点があるとすれば、他者と協力し合うことで自分も幸せを感じるというコミュニティ意識ではないだろうか。独占による一人勝ちから共生のモデルへと、社会は少しずつ動いている。知識を世界中の人々と共有し、さらに“ツカエル”ようになる百科事典を目指す『ウィキペディア』は、まさにこの共存のモデルを“知識”をベースに実現したコミュニティなのではないだろうか。

ここから読み取れるのは、フリーソフト/オープンソースは単なる技術の仕様ではなく、人々に自由を与え、コミュニティを形成し、政治や社会情勢にも影響を与える“方法”だということだ。一人勝ちから共生のモデルへ、世界中でフリーソフトウェア運動によるナレッジの共有コミュニティが広がることを期待したい。

MEDIA REVIEW MIX

## コピーレフトから知的財産権の問題まで フリーソフトウェア運動の思想を網羅する

「私たちの時代にも、哲学者がいる。彼は芸術家ではなく、職業的な作家でもない。彼はプログラマーである(序文より)。

フリーソフトウェア運動の生みの親であるストールマンは、UNIXの代替OSとしてGNUシステムの開発に着手し、新たな著作権の概念である「コピーレフト」や「GNU/GPL」を生み出したことでも知られている。本書は、プログラミングに関する技術書ではまったくない。むしろ、フリーソフトウェアの思想を表明するマニフェストであり、デジタル時代を生き抜くためのサバイバル哲学書でもある。

ストールマンは、フリーソフトウェア運動とは個人が自由にプログラムを改変、再配布することにより、他者を助け、よりよい共同体を作ることであり、技術的な発展を重視するオープンソース運動とは目的が大きく異なると主張する。

著作権という名のもとにプログラムのソースコードが隠蔽され、音楽CDのコピーが取り締まりの対象になっている現在、彼の言う自由を守るための戦いはより激しさを増しているが、このことに関してフリーソフトウェアの考えに基づいた論を展開している。彼は、著作権は作者の自然権ではなく、市民に有益な情報が提供されるように便宜上作られたもので、時代の変化とともに柔軟に変わるべきとしている。こうした考えからGNU/GPLが生まれた。これはパブリックドメインではなく、既存の著作権システムを使いながら著作権者の権限を制限し、ユーザー側の自由を大幅に増大させる巧妙なライセンス方式である。この分野に直接関わる人でなくとも、デジタル時代を生き抜くための新しい価値観を提唱した哲学書として、ぜひ読んでほしい。



Book NO.7

『フリーソフトウェアと自由な社会』  
著者：リチャード・ストールマン  
訳者：株式会社ロングテール / 長尾高弘  
出版：アスキー

エッセイ集として、ストールマンのフリーソフトウェアの思想をまとめている。「フリーソフトウェアの歌」の楽譜が付いているのもポイント。

メディアレビュー  
MIX



## [インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ] ご利用上の注意

このPDFファイルは、株式会社インプレスR&D(株式会社インプレスから分割)が1994年～2006年まで発行した月刊誌『インターネットマガジン』の誌面をPDF化し、「インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ」として以下のウェブサイト「All-in-One INTERNET magazine 2.0」で公開しているものです。

<http://i.impressRD.jp/bn>

このファイルをご利用いただくにあたり、下記の注意事項を必ずお読みください。

- 記載されている内容(技術解説、URL、団体・企業名、商品名、価格、プレゼント募集、アンケートなど)は発行当時のものです。
- 収録されている内容は著作権法上の保護を受けています。著作権はそれぞれの記事の著作者(執筆者、写真の撮影者、イラストの作成者、編集部など)が保持しています。
- 著作者から許諾が得られなかった著作物は収録されていない場合があります。
- このファイルやその内容を改変したり、商用を目的として再利用することはできません。あくまで個人や企業の非商用利用での閲覧、複製、送信に限られます。
- 収録されている内容を何らかの媒体に引用としてご利用する際は、出典として媒体名および月号、該当ページ番号、発行元(株式会社インプレス R&D)、コピーライトなどの情報をご明記ください。
- オリジナルの雑誌の発行時点では、株式会社インプレス R&D(当時は株式会社インプレス)と著作権者は内容が正確なものであるように最大限に努めましたが、すべての情報が完全に正確であることは保証できません。このファイルの内容に起因する直接のおよび間接的な損害に対して、一切の責任を負いません。お客様個人の責任においてご利用ください。

このファイルに関するお問い合わせ先

**株式会社インプレスR&D**

All-in-One INTERNET magazine 編集部

[im-info@impress.co.jp](mailto:im-info@impress.co.jp)